

これらを含めて科目別の要因から試算される来年度内の支出合計は4520万円強となる。また51年1月からも現在の会費を据置いた場合の収入は4426万円強で差引94万円の赤字となる（なおこの額は昭和49年度の赤字繰越し見込額を含んでいない）。

定款により通常会費は前納制（51年度の会費は50年末までに納入する）であることから、今年5月の総会で仮りに会費値上げが可決されても昭和50年度財政に寄与するのは値上げの3ヶ月分だけである。試算によれば51年1月から会費10%、12%値上げした場合の来年度の収支

はそれぞれ12万円の赤字、2万円の黒字となる。したがって49年度からの繰越し金の額にもよるが年度内で収支バランスを計るとすれば51年1月からの会費は平均10%の値上げをせざるを得ない。なお学会財政および来年度の見通についてご意見のある会員は会計担当理事：野本真一（東京都千代田区大手町 1-3-4, 気象庁予報課）または川村清（東京都杉並区高円寺北 4-35, 気象研究所地球化学研究部）までご連絡下さい。

（以上）



新井 正・西沢利栄著

水温論 水文学講座 10

共立出版, 1974, 297p, 2500円

近年、環境問題に関連して、河川や湖沼の水温に関連した問合せを受けることが珍しくない。いわば門外漢とも言ってよい私のところにこうした質問があることは、海水温と比べると観測資料が入り難く、しかも気象が関係する境界領域の陸水の水温についての専門書がなかったことが主な原因であろう。本書が刊行されたことは、気象関係者にとって幸なことである。

本書は二人の著者が十数年前、水温調査会に所属していた当時から、日本各地で行った多くの観測の経験と資料をもとに、主として陸水の水温を物理学的、気候学的にまとめた労作である。ちなみに内容を列挙すると、(1) 水温の研究の歴史などの序説に続いて、(2) 水温調査法、(3) 水面熱収支、(4) 河川水温の年度化・日変化・分布・熱収支、河川水温に及ぼす人間の影響、(5) 湖沼および貯水池の水温の特性と熱収支、人造貯水池の水温と水温の御制、(6) 地下水の水温と温泉の温度、(7) 温排水による熱汚染、(8) 水田水温（括弧内の数字は章を示す）。

全体を通して記述が綿密である上に、各章末に多数の文献が挙げられているので便利である。微気象や地表面の熱収支、蒸発等の研究者はもちろん、小気候や環境問題を取扱う気象技術者にも一読をすすめたい。

（河村 武）

編集後記

2月号の天気編集委員会で“編集だより”のようなものを載せたらどうかの案がでた。なるほど言われて見れば、今までこのポイントが一つ落ちていたようにも思える。

編集の舞台裏の話を書くことで、多くの会員の方々との親密感がもてるようにもなろう。

1月号から会員の広場のコーナーを新設したので、

各地からのご投稿を期待している。400字詰1.5枚程度でよい。解説や論文のすき間に、いい埋め草を置きたい。

毎日の商業新聞の小さな記事に、真実なものがあるように思える。このような記事が記憶に残ることが筆者には多い。

（M）